

原典…『聖教全書』— P340 ㊦7～ P341 ㊦14

■浄土教における菩薩道の展開 —— 信心が菩提心として展開する

唯識において、人間の迷いからの解脱を「転識得智」と表します。自己に執着して止まない自我心を翻し、執われなきさとの智慧を得るということです。そして、無始時來性なる虚妄分別が転ぜられ、執われなき世界にいたるについて、十地の段階を経て成し遂げられていく行が「十波羅蜜」として表されます。迷いの岸からさとの岸へという到彼岸の行によって智慧を完成していくことが実践業として説かれますが、その第六地において般若波羅蜜が得られます。一切の執われを超え離れた根本無分別智が得られるのが第六地の境地で、龍樹の説かれた般若思想によれば、それが難行道の終局の目的です。ところが、唯識においては、根本無分別智がさらに後得清淨世間智として、自ら世間にはたらく智慧として展開するのです。

そこで、菩薩の巧方便回向ということが問題になってくるのです。第七地から第十地にいたる四地、あとの波羅蜜のところに説かれる巧方便回向ですが、それは菩薩が衆生とともに、自ら得た功德をさとりに向けて回向することであり、すべてをありのままに見ることです。つまり、すべての人びとの苦しみや悲しみを自身のこととして引き受ける大悲のこころと般若の智慧がひとつに俱備され、円満に具わったものです。智慧のゆえに世間に執着せず、大悲のゆえに衆生を捨てない無住処涅槃の行であり、言い換えれば、涅槃と娑婆世界と常に往復しているはたらきそのものです。そういうことが第七地にいたった菩薩の巧方便回向として説かれ、『浄土論』において取り上げられているのです。それが柔軟心であり、願生心を内実とする菩提心として、さらに積極的に説かれています。菩提心は、言うまでもなく、さとりを求めて止まない心であり、私どもにさき立って道を歩んでいかれた菩薩と呼ばれている者に与えられる大きな使命感であると思います。

曇鸞によると、信心が菩提心として展開してくることは、すでに『大経』の主要な眼目です。ご存知のように、法蔵菩薩によって選択摂取された本願は、釈尊があえて五濁悪世を選んで出現し説かれました。釈尊の説法を通して、衆生のうえに本願が成就したとき、衆生は如来の呼びかけに応えて、如来が招喚する浄土に往生していく者となるということが下巻の内容です。その下巻冒頭に、第十一願、第十七願、第十八願の成就文が位置しています。第十一願は必ず正定聚不退転の身となって滅度のさとりを開く者となる。それは、三世十方にわたる諸仏が称名し、その称名を聞くことによって本願が衆生にいたり届けられる。そこにおいて、仏の本願のまことが衆生の信心として成就するということが明らかにされました。それが『大経』下巻冒頭の成就文であり、そのことを離れては真実の教えは成り立たないと思います。その信心が菩提心であることを説かれたのが、本願成就文のあとに説かれた三輩段です。上輩・中輩・下輩の三輩は、出家の人、在家の居士、在家止住の身であって、ただ教えを聞くということしかなしえない者を指します。その上輩・中輩・下輩の三輩は、それぞれ立場、徳は違っても、共通するものとして、一向に無量寿仏の御名を念ずるのです。そして、もうひとつは、無上菩提心を発することです。このうえなきさとりを求めて止まない心を発することが三輩に共通することとして挙げられています。曇鸞は『浄土論』に説かれた信心、柔軟心は無上菩提心である、ということを明らかにするにあたり、『大経』に示されてあることに依りながら、『浄土論』において菩提心の構造、さとりを求める内実はどういうものなのか、我われの求道心、宗教心の内実はどういうものなのか、と論じているのです。

(『幡谷明講話集』6 浄土論註講義下 P107～109)

■障(離)菩提門・順菩提門の位置

〈解義分の組織〉

- 一者願偈大意・・・一偈の大意を示し
- 二者起観生信・・・安楽国を観察し本願力を信ずるに五念門の意味あることを教え
- 三者観察体相・・・その観察について、何を対境とするかを挙げ
- 四者浄入願心・・・その対境は広く二十九種あるけれども、狭く法蔵菩薩の願心につづめることができる旨を述べ
- 五者善巧摂化・・・更に廻向門の意味を詳説し
- 六者離菩提障・・・その廻向門の障りとなる三心を離れることをすゝめ
- 七者順菩提門・・・廻向門に必ず添はなければならぬ三通りの心得を教へ
- 八者名義摂対・・・障の三心と順の三心との名義を摂対し
- 九者願事成就・・・願事の成就することを述べ
- 十者利行満足・・・最後に自利利他の二行満足する有様を挙げられた。

(柏原祐義著『真宗通解全書』第一 P 516～517)

■「知進守退」—— ふたつの解釈 (同上P 113)

- ①「進む」——菩提。さとのりの意味。
究極のさとりに向かって進む意。
「退く」——七地沈空の難に墜ちること。
七地沈空の難に墜ちることから身を守ること。
- ②知進守退は進んで衆生を済度することを知り退いて二乗自調自度の心にならぬように守る。知空無我は衆生を済度しながら我身の功にせず、済度する自分を空じ無我になるという。

(稲葉円成師『往生論註講要』為法館 P 188)

■我執を遠離して菩提に順ずる

「障菩提門」の障げる心とは何かと言え、何に依って遠離するのかを説いており、それが智慧、慈悲、方便という三種のはたらきです。仏の智慧によって遠離されるのは、「自身住持」の心です。自身住持とは、自身を正しきもの、すぐれたものとして我が身に固執する心です。それに対して、如来の慈悲のはたらきは「無安衆生心を遠離」させることです。衆生は不安のなかを生きていかななくてはならず、途方に暮れてしまいます。そのなかで人はどうなろうと構わないという身勝手さを遠離して、そこに真実の心を呼び戻してくださるのが仏の慈悲です。そういう如来の智慧と慈悲のはたらきによって、自身住持の楽を求める心が破られ、無安衆生心が破られ、尊い人と認められ他からの尊敬を受けようという名聞利養の心を遠離する、ということが出てくるのです。名聞利養を遠離していくところに方便があるということでしょう。方便は「近づく」ということで、金子先生は、智慧と慈悲の心をもって相手の立場を正しく理解し、それに随って善処していくことである、といわれました。

(『幡谷明講話集』6 浄土論註講義下 P 117)